第34回 街道

東海道五十三次の内

岡崎宿～安城字津桑屋まで歩く

ＹＵＭＥ追い人

ホテル「ルートイン豊川インター」の朝食は、食事処で６時30分から始まる。

本日は2018年５月13日㈰　食事をとり、今日は長野へ帰るので身支度と荷物の整理があり忙しい朝の時間である。

ルートインの駐車場に大型バスが待っており、８時30分出発する。昨日１日歩いてゴールした岡崎城近くの駐車場にバスが到着、下車。バスの駐車場で、本日の歩く工程と、歩く時の注意事項（今日は雨が降りそうなので雨の場合はコウモリ傘禁止、雨合羽又はポンチョで行動する）をウォークリーダー（随行案内者）より聞く。

今日もウォークリーダーは「旅人企画」の、１号車緒方さん（男性）２号車矢尾さん（女性）である。トラビスジャパン添乗員は１号車松橋さん、２号車石原さんでこの３日間同じメンバーだ。

岡崎城公園

説明を受けた後、準備運動をして昨日入城した岡崎城に入る。昨日見た「時計台」の他に、再生された「岡崎城寝殿」「岡崎城天守閣」「城の石垣」（城周辺の石垣は３種類あり、時代の移り変わりで積み方が変わるのが良く分かる）等があり、見る時間が足りない。特にカラクリ人形はいつまで見ていても飽きる事が無い。仕組みがどうなっているか見たい。かの有名な東芝の創始者の方が、からくり人形の原理をいつまでも調べたという。歯車やその原理を使って色々な家電品に利用したのだろう。

岡崎城大手門

岡崎城　初期の石積

岡　崎　城

徳川家康誕生の地であり、三河武士の発生の地のここは徳川家にとって重要な場所で、江戸時代にこの岡崎城、駿府城を治める大名は、徳川家に、又は江戸幕府に貢献した大名が与えられた城で、「出世城」と言われていたと、ウォークリーダーの話。

『岡崎宿の北方に、松平氏の菩提寺である「大樹寺」があります。徳川家を唯一檀家とする菩提所で、「松平氏八代」の墓があり、この寺に「家康朱印状」で寄進された寺領は六百十六石四斗三升にのぼり、この石高は歴代将軍が続けました』と岡崎城公園でのウォークリーダーの説明。又『岡崎宿は東西の街並みが三十六町五十間あり、家数1,565軒（内　本陣３軒、脇本陣３軒、旅籠112軒）です。人口は女性3,413人、男性3,081人、合計6,194人で、東海道五十三次の中でも最大級の宿場でした。家康の生誕地という事と岡崎城があったから、又温暖で以前から開けていた地域だった事が、岡崎宿の発展した理由です。

岡崎城　カラクリ人形

岡崎城と寝殿（再生）

天正十八年（1590年）８月に家康が駿府城から、関八州（関東）の「江戸城」に移り、10月に豊臣側の田中吉政が岡崎城に入城。吉政は矢作川に初めて橋を架け、東海道を岡崎城下へ引き込み、曲がった道を宿場内に二十七カ所作りました。吉政は10年かけて「二十七曲り」の城下町を作ったと言われていますが、江戸時代の安定政権が続くと防衛の意味も無くなり、城下町と宿場町の両方が栄えました』

二十七曲りの案内柱

街を走る道路の角々に（い）から始まり、27個立っている案内柱は、昔は木製の簡単なものだったと想像する。（なかったのかな）今は太い木の擬似柱で立っている。

数ある中に今風の石製道標も立っている。岡崎城を回る半分の道路の角々にこの道標が建っており、「田町」と言う角で最終の様だ。須坂市の城下町の様に３回まわって同じ所に着くかと思うと迷う道路で着かない。ここ岡崎城下も、今では案内柱があるから分かるが、迷う様に作ってある道路だ。

岡崎城下「二十七曲り八帖村」の石柱

岡崎宿の街中を西へ向かって歩く。途中から雨が降ってきた。皆、合羽かポンチョを着る。岡崎城下「二十七曲り」の（れ）の所に高さ１ｍ程の「岡崎城下二十七曲り　八帖村」という石柱がある。（現在では八丁村に改められた）

八丁味噌製造元「㐂」の店舗

少し歩くと黒の壁の中に白いアクセントのある洋風の建物と、大きな蔵に付いている「㐂（カクキュー）」の看板が見えてくる。

岡崎城から西へ「八丁（約870ｍ）」の所にある味噌蔵。これが全国でも有名な「八丁味噌」を造っている所なのだ

㐂味噌蔵

と関心を持って入る。
　蔵の中に入って「囚」の女性担当ガイドの話を聞く。
　『江戸時代前の戦国時代には、「囚」の先祖は今川義元の家臣だったのですが、「桶狭間の戦い」で織田信長に負けて武士をやめ、寺に入りその寺で作っていた味噌造りを学び、数代の後、岡崎城から八丁西の村に住んで味噌を造っていました。その味噌を家康が戦争時に兵隊に持たせました。力の出る健康食品です。

囚女性担当ガイドの説明を聞く

　江戸時代に味噌造りを確立し、370年以上変わらぬ伝統製法で造られています。大豆と塩のみを原料に大きな杉の木桶に仕込み、蓋の上に人の頭程の天然の川石を桶に積み上げ、「二夏二冬」じっくり２年以上熟成して作ります。
　矢作川の周辺は気候が温暖で湿度も高く、味噌を熟成するのに最適な地と言えます。

味噌を熟成する味噌蔵

　東海道五十三次という街道があって商売に向いており、良い水に恵まれ、海岸に近いので塩もとれる最適な地と言えます。最近では八丁味噌の愛好者が数多くおります。政治家、作家、芸能人、作曲家等、幅広い方に愛用されています』
　戦国時代に、甲斐の武田信玄が味噌と小麦粉で「ホウトウ」を、越後の上杉謙信が笹に包んだ餅や飯を兵士たちに持たせた様に、家康は味噌を持たせたとの事。

国の登録有形文化財の建物

　資料館に入る。東西30ｍもある大きな蔵で、その中に杉製の桶がたくさんある。桶の高さは台の上から約1.8ｍあり（全高さ約2.3ｍ）直径もその位ある大桶。その桶の上に人の頭の大きさ位の川石が山に積んである。桶の中の味噌６ｔの所、その上に川石３ｔ積むと聞く。桶は100年使えるという。石が積まれてあるてっぺんには丸い石が乗っている。何のまじないであろうか。

　この蔵の基礎は矢作川が氾濫しても桶が水に浸からないように、石垣が高く積まれている様だ。洪水時の知恵が生かされている蔵である。
　「囚」の本社屋（旧本社事務所）は、平成８年愛知県では初の「国の登録有形文化財」に指定されている。
　八丁味噌は、色が濃い茶色（黒系だけど減塩）で丸々２年熟成されている味噌だ。味噌汁を「試飲」で戴く。美味しい味噌汁だ。ここにはみそ味のソフトクリームやうどんが食堂にて食べる事ができる。味噌造りの様子を等身大の人形で再現してあり、ちょっとびっくりする。
　「囚」の女性担当ガイドによると『八丁味噌は、蒸した大豆を使用し、旨味や苦み、渋みがある事が条件で、国が定めた様々な基準をクリアした物だけが「八丁味噌」を名乗る事ができます』
　時間をかけて行う事は大変な事だけれど、この文化を残していただきたいと思う。
　雨の中「囚」の八丁味噌蔵を後にする。江戸時代に岡崎城近辺では、傘と三河木綿も特産品と聞く。

矢　作　橋

　矢作川を渡る。
　矢作川は大井川と同じで洪水があり、治水では頭の痛い大変な所と聞く。江戸時代、日本の中でもここは川幅が広く、橋の長さは約374ｍあったという。
　歌川廣重の東海道五十三次に描かれている岡崎宿は、矢作川の大橋を大名行列の一行が渡っている。向かっている先に岡崎城が見え、天守閣が三つあり、その構造は三重三階の建物になっている。岡崎宿は江戸より三十九番目の宿場で、八十里十三町（約315㎞）あり、次の宿場の池鯉鮒宿（ちりゅうしゅく）（知立、ちりゅう）まで三里三十町（約15㎞）ある。廣重が描いた絵では池鯉鮒宿から岡崎宿に向かって（江戸に向かって）橋を渡っている。
　徳川家光が将軍として江戸に行く時、土橋（板の上に土を覆いかぶせた橋）を板橋に作り替えたという。

　矢作一里塚があったという処を通過し、勝連寺の門を街道から見て中に入らなかった。この寺は真宗大谷派の寺で、この近辺では親鸞聖人に関係する有名なお寺と聞く。

元第一岡崎海軍航空隊　配置図

　薬王寺を過ぎると、愛知県安城市に入る。江戸日本橋から数えて八十三里の尾崎一里塚を見て、村社熊野神社に寄り参拝する。村社ではあるがかなり有名なお宮だ。ここに元第一岡崎海軍航空隊の配置図が、ステンレス製の看板に書いてある。岡崎市、安城市の両市にかけて航空隊の部隊が、何十ヵ所もあって、どの部隊が何処にいたと配置されている図面である。この様な配置図は初めて見る。海軍航空隊の特攻隊慰霊碑が近くにある。

　ＪＲ宇頭茶屋駅の近くを通り、15分程で本日のゴール地点に到着。雨はまだ上がらない。
　バスがそこに待っていた。駐車場で足、腰、手首等の整理運動をし、雨具を脱いでバスに乗る。雨の「歩け歩け」はつらい面もある。以前雨が降って思い出すのは、東海道五十三次の初日に日本橋から銀座を歩いた時、箱根石畳みの急坂を歩いた時など、雨の日はわりと印象が強く、覚えている。
　バス中で着替える人、汗を拭く人、様々である。湿気がバス中いっぱいになり、窓ガラスがだんだん曇ってくる。
　昼食をバスの中で戴く。今日の弁当は「いこい、はなれ」という処で作った美味しい弁当だ。食事が終わってバスはすぐ出発する。
　バスは宇津茶屋近くの駐車場を出て、長野に向かい、東名高速道を走る。弁当を食べた後でもお菓子を食べる人、寝る人、おしゃべりをする人、それぞれでこれが楽しい。
　南信方面の方のバスは南信へ、中信方面の方が乗るバスはこのまま中信へ、東北信方面の方は、中信方面の方が乗るバスからマイクロバスに乗り換えて、各方面に出発する。
　二泊三日の「歩け歩け」の旅は、素敵で有意義な旅であった。

次回（池鯉鮒宿～鳴海宿）に続く